



一般社団法人
日本医工ものづくりコモンズ

コモンズ通信

賛助会員との交流を目的として

1

2020年8月

北島政樹先生を偲んで

日本医工ものづくりコモンズを設立された北島政樹先生が、2019年（令和元年）5月21日に、ご逝去されました。77歳でした。北島先生は、正に日本の医工連携を臨床医学分野から強力に推し進めて頂いておりました第一人者の方である事は、賛助会員の方全員がよくご存じの事と思います。日本の医工連携は、まだまだ発展途上にあると筆者は認識しておりまして、いよいよこれからという時に、北島先生を失いまして、本当に残念でなりません。北島先生が、全身全霊をこめて推進されておられた医工連携を、何とか継続させて、先生のご遺志を繋ぐことが、残された私どもの使命と考えております。そこで、賛助会員の皆様にお送りするコモンズ通信の第一号として、北島先生がコモンズ発足以来推進されてきた医工連携に関して、ご紹介させていただきます。

北島政樹先生は、1966年（昭和41年）に慶應義塾大学医学部をご卒業されて、その後足利赤十字病院外科部長、杏林大学第一外科教授を経て、1991年（平成3年）に慶應義塾大学外科学教室に就任されました。以後、同大学病院病院長、同大学医学部長の要職を歴任されました。その後、国際医療福祉大学に移られ、同大学三田病院長、副学長、学長、副理事長に就任されています。国内外の関連学会および関連団体でのご活躍は、枚挙にいとまがなく、100近くの組織の理事長などの要職に就任されていたと伺っております。さらに、海外でのご活躍も極めて顕著で、世界の医学界をリードしている New England Journal of Medicine の編集委員を務めておられ、文字通り、世界の医学のリーダーであられました。

筆者が、北島先生とお会いしたのは、慶應に戻られて間もない1992年の頃でした。そのころに、筆者の大学院時



図1. 2009年11月21日コモンズ発足記念講演会（東京大学本郷）で講演される北島先生

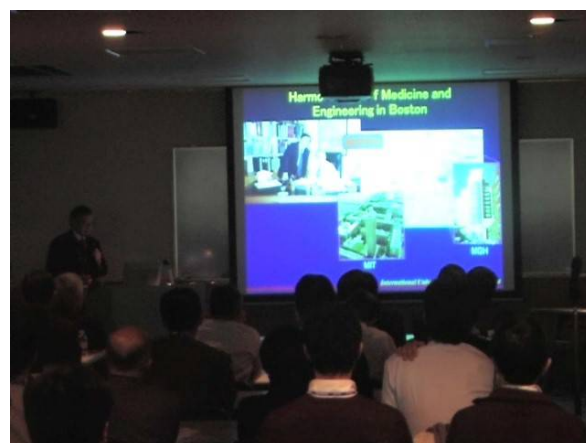


図2. 北島先生が、ご講演でよく使われていた MGH で学ばれた医工連携のスライド（不鮮明ですいません）

代の恩師であった Galletti 教授（米国 Brown Univ.）が来日された時に、慶應の医学部を訪問され、その席に北島先生がいらして頂いていました。その頃、北島先生は、既に、手術ロボット開発の構想を持っておられ、理工学部のロボット研究者をご紹介させて頂いた事がありました。今から、考えますと、相当早い時期に手術ロボットに着想されていた

わけで、北島先生の時代を先取りする力の凄さを改めて感じさせられます。その後、医学と理工学部との連携に関しても積極的に推進して頂きまして、色々な交流ができるようになり、特に、北島先生が代表者となられた 21 世紀 COE プログラムでは、正に慶應の医工連携が著しく加速するきっかけとなったわけです。

その後、筆者が日本機械学会の副会長を仰せつかっておりました時に、日本のものづくり工学特に機械工学分野が、医療技術の発展に貢献していないという議論が巻き起こりまして、それを何とか解決して頂ける医学側の先生は、北島先生であるという事になり、北島先生にご相談に伺いましたところ、コモンズのコンセプトをご提案して頂きまして、あっという間に、日本の医工連携を新たな切り口で推進する日本医工ものづくりコモンズが発足致しました。北島先生の行動力と瞬発力は、ものすごいものがありまして、大事な事であれば、あっという間に関係するキーパーソンに電話されて、話が決まって行きます。そのような経緯で、コモンズをまず任意団体として発足させ、その記念講演会を、2009 年 11 月 21 日に東京大学本郷キャンパスで開催致しました。講演会のビデオから、北島先生のご講演の様子を写真にしましたのが、図 1 と 2 です。この発足記念講演会は、マスコミにも取り上げられ、コモンズの活動に多くの期待が寄せられました。図 3 に、新聞記事を掲載いたしました。

北島先生が、多くのご講演の中で、コモンズの趣旨をご説明して頂きましたが、その中で、忘れられない先生のお言葉があります。「コモンズには、リスでも入れる」というご説明でした。米国のボストンには、ボストンコモンズという講演があるのを、多くの方がご存じかと思いますが、あの地域では、リスが普通に人間と共存してしまっていて、あちこちに表れます。筆者が留学しておりましたロードアイランド州でも同様でした。コモンズは、そもそも医療現場とものづくり工学現場を繋いで、医療機器開発を目指す方は、誰でも参加できるという趣旨にちなんで北島先生が、そのような表現をされていました。

その後、コモンズが単に任意団体では、社会で認知されないで、活動を大きくすることが難しいと指摘されまして、法人化を大至急すべきと主張されておられました。筆者も、大きな学会と小さな学会の両方の運営に携わった経験から、北島先生のご指摘が極めて正しい事はよく分かっておりまし

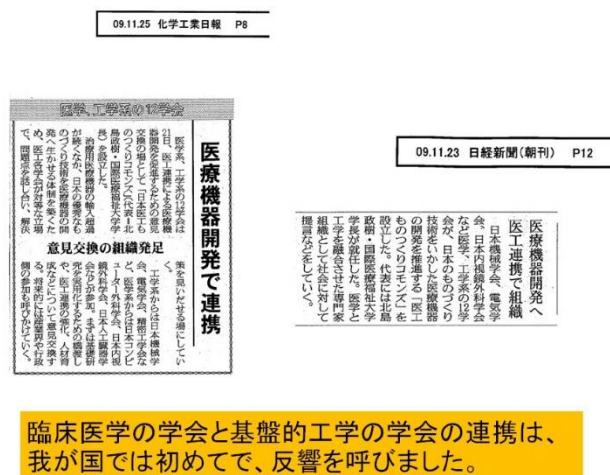


図 3. コモンズ発足記念講演会が紹介された新聞記事

たので、役員の方の先生方のご協力を頂きながら、2013 年に一般社団法人に組織化を致しました。設立総会が、2013 年 5 月 17 日に、慶應義塾大学三田キャンパス北館ホールで開催されまして、設立総会でご挨拶された北島先生を、図 4 に掲載いたします。



図 4. 一般社団法人設立総会で、ご挨拶された時の北島先生（2013 年 5 月 17 日）

北島先生のご指摘の通りで、一般社団法人として組織化しましたら、多方面から声をかけて頂けるようになり、コモンズの活動を本格的に展開できるようになり、現在に至っております。それらの詳細は、賛助会員の皆様がよくご存じかと思いますが、割愛させて頂きますが、コモンズの活動の顕著な例として、MINC の会の設立の経緯をご紹介させて頂きます。そもそもコモンズは、医療現場とものづくり工学現場を繋いで、医工連携という新たな価値を生み出す事を、活動の主目的としておりますので、医療現場と至近距離での活

動を多く行っております。そこで、国立国際医療研究センターの大西真先生（前院長）のご厚意により、コモンズと正式に提携させて頂きまして、日本の代表的な医療機関の一つである国立国際医療研究センターとの研究会 MINC の会を設立する事になりました。



図 5. 国立国際医療研究センターとコモンズが正式に提携して、MINC の会を設立。国立国際医療研究センター理事長の春日先生と北島先生が、硬く握手をして頂きました。

図 5 の締結式は、2015 年 3 月 18 日に行われまして、日刊工業新聞からの取材を受けました。2015 年というと、AMED や東京都医工連携 HUB 機構が立ち上がった時期です。正に、日本の医工連携が大きく立ち上がる時で、コモンズが本格的に医療機関との連携に基づく活動を始動させた時期とシンクロしており、北島先生の時代を先取りする慧眼には、改めて感動する気持ちで、一杯になります。

MINC の会が設立され、国立国際医療研究センターの医師の先生方の医療ニーズに基づく技術シーズマッチングが実施されました。その後、岡山のカワニシホールディングス社長の前島洋平先生（腎臓内科の医師の先生でもある方です）のご厚意により、カワニシホールディングスが発刊している MedicalGlobe という海外の医療機器開発情報誌の内容を基に、海外の医療機器勉強会を MINC の会が行う事になりました。この勉強会の凄い点は、MedicalGlobe で紹介されている海外医療機器情報に関して、国立国際医療研究センターの医師の先生方が討論を行うという点です。医療センターの最前線で活躍されている医師の先生方から、極めて鋭い視点の意見が、次から次へと述べられ、極

めて中身の濃い勉強会になっています。その様子を図 6 に示します。



図 6. 海外医療機器勉強会の様子

海外医療機器勉強会は、次第に多くの方面から注目が集まり、毎回 AMED、経産省、厚労省、特許庁などの官の方々も、お忙しい業務の間に時間を割いて頂いて、参加されておられます。この勉強会は、今後とも継続する予定ですので、賛助会員の皆様も是非ともご参加頂きたいと存じます。

北島先生の思い出は、尽きたところがありません。今後コモンズ通信で、色々な機会を通して、北島先生が推進して頂きましたコモンズの医工連携をご紹介させて頂きたいと思えます。

最後に、北島政樹先生のご冥福を心よりお祈り申し上げて、コモンズ通信第一号を締め括りたいと存じます。

（文責：谷下一夫 日本医工ものづくりコモンズ理事長）

賛助会員の皆様のご意見・ご要望をお聞かせ下さい。

賛助会員の皆様との交流を目的とした「コモンズ通信」を、今後継続的に発刊して、皆様にお送りさせて頂きます。賛助会員の皆様から、コモンズの活動に関して、ご意見・ご要望が御座いましたら、ご遠慮なく、事務局までメールでご連絡頂ければ幸いです。

support@ikou-commons.com